

<b>Title</b>	『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書（七書）』の言語資料的価値について
<b>Author(s)</b>	小林, 茂之
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :33-39
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5264">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5264</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書 (七書)』の言語資料的価値について

小林 茂之

## 0. はじめに

聖書の初期の英語訳として、ウイクリフ派の聖書 (*Wycliffite Bible*) が有名であるが、11世紀の後期古英語の時代に古英語に翻訳された聖書が残っている。『ウエストサクソン福音書』と『古英語版旧約聖書 (七書)』である。

古英語による聖書の翻訳が行われた背景には、既にアルフレッド大王 (Alfred the Great, 849-899) がラテン語文献の古英語訳の事業を行ったことがある。その中には、『詩篇』も含まれていた。その当時、ラテン語による聖職者教育が困難になったことが理由の一つであると考えられている。北部ノーサンブリア (Northumbria) の、聖職者教育の拠点であったリンデスファーン修道院 (Lindisfarne Abbey) は、793年にヴァイキングの襲撃を受け、その後も度重なるヴァイキングの襲来のために多くの修道院や教会が荒廃したのである。

本小論では、『古英語版旧約聖書 (七書)』の写本の一つであるケンブリッジ大学図書館蔵の写本 (MS. Cambridge University Library, li, 1. 33) の英語史上の資料的価値について取り上げる。この写本は、言語資料的価値の観点からは書写年代が古い標準テキストとされる写本以上に重要である。この写本の書写年代は、ちょうど古英語から中英語への過渡期に当たる12世紀であるので、ノルマン人による征服後に起きた急激な英語の変化を反映していると考えられるからである。

## 1. 『古英語版旧約聖書 (七書)』の写本

ケンブリッジ大学図書館所蔵の『古英語版旧約聖書 (七書)』の写本は、MS. Cambridge University Library, li, 1. 33の中に含まれている。この写本は、1574年にケンブリッジ大学コーパスクリスティコレッジ (Corpus Christi College) 学寮長を兼ねていた大主教パーカー (Matthew Parker) がケンブ

リッジ大学に寄贈したものである。同大学の写本カタログでは、以下のように記載されている<sup>1)</sup>。

A quarto, on vellum, 450 pages of 24 lines each, handwriting Normanno-Saxon, and ascribable to the early part of the xii century.

HOMILIES, PASSIONS OF SAINTS, AND OTHER SACRED PIECES, in Anglo-Saxon.

### 1. *The Twenty-four Chapters of Ælfric's translation of Genesis* (pp. 4-44)

The text, though somewhat modernized, is substantially the same as that printed in the *Heptateuch*, ed. Thwaites, Oxf.1698. Ælfric's dedicatory letter to the ealdorman Æthelweard is prefixed.



写真 1

MS. Cambridge University Library, li, 1. 33 の背表紙

上の記述の要点は、「12世紀初めのノルマン系の写字生による写本で、その最初の4-44ページに『七書』が置かれている。実質的に1698年に印刷された『七書』と同じだが、いくらか当代化されている」ということである<sup>2)</sup>。以下では、この写本を同書の標準的なテキストとされている Crawford (1922) にしたがって、C写本と略記する。

『古英語版七書』の現代のテキスト Crawford (1922) は、大英図書館蔵の写本 (MS. British

Museum, Cotton, Claudis B. IV) とオックスフォード大学ボドリアン図書館蔵の写本 (MS. Bodleian, Land Misc. 509) を底本としている。以下では、上と同様に、これらの写本をそれぞれ B写本、L 写本と略記する。つまり、ケンブリッジ大学図書館蔵のC写本は、アルフリッチ (Ælfric) が原本を書いた時代から約1世紀後の12世紀に作成されたので、B写本やL写本が、原本が書かれた時代により近い時代に書写されたと考えられている。

Crawford (1922: 424-425) は、C写本が他の二つの写本と全く異なる本文を持っている箇所を示している。以下に結論だけを引用する。

- (1) Preface to Genesis, Gen. caps. i-iii, vi-ix. . xii-xxii. 19  
= Text identical with that of B and L.
- (2) Gen. iv.-v., x.-xi. = Completely new text.
- (3) Gen. xxiii-xxiv. = Text where C and B L are interdependent.  
(Crawford 1922: 425)

Crawford (1922) は、異本間の関係について考察しているが、ここではこの問題に立ち入らない。

## 2. B写本との異同

### 2.1 異同の概観

Crawford (1922: 425) の(2)にあげられた部分から一箇所をサンプルとして、異同を示すことにする。以下に、Genesis CAP. IVの冒頭の文をグロス (gloss) とともに示す。

MS. B Soðlice Adam gestynde Cain be Euan his gemæccan, 7 ðus cwæs:  
truly Adam begot Cain through Eve his spouse and thus said  
Ðisne man me sealed Drihten this person to me gave the Lord

MS. C Adam soðlice æfter þisum breac his

wiues, 7 heo eacnode 7

Adan truly after this violated his wife and she conceived and

acende Cáin, 7 cwæð: Ic æfde mannan þurh God.

gave birth to Cain and said I had man through God

(Crawford 1922: 91)

Gen 4 : 1 Adam vero cognovit Havam uxorem suam quae concepit et peperit Cain dicens possedi hominem per Dominum (*Vulgate*)

Crawford (1922: 437) で指摘された語彙的な対立は、この箇所でも確認される。「神」を表す語が、B写本では *Drihten*、C写本では *God* となっている。この語彙的な対立については、2.2節で取り上げる<sup>3)</sup>。

C写本が、全般的にはB写本よりもラテン語聖書に忠実であることがグロスから理解されると思われる。たとえば、B写本における前半部分では、‘Adam gestynde Cain be Euan his gemæccan’の文意はラテン語聖書とかなり異なっており、後半部分の‘Ðisne man me sealed Drihten’では、語順の違いは無視するとしても、ラテン語聖書とは逆に主語が *Drihten* になっている。

次にあげるGenesis CAP. IV 2 も同様である。

MS. B Eft he gestrynde Abel.  
again he begot Abel

MS. C Eft heo acende his broðor Abæl.  
again she gave birth to his brother Abel

Gen 4 : 2 rursusque peperit fratrem eius Abel (fuit autem Abel pastor ovium et Cain agricola) (*Vulgate*)

ラテン語聖書では、前節からの文脈上から *peperit* の主語はイヴと解釈されるので、C写本がB写本よ

りもラテン語聖書に忠実である。

## 2.2 語彙

Crawford (1922: 437) で指摘された語彙的な対立を以下に引用する。

MS. C prefers *god* where MSS. L and B have *drihten*.  
*gear* „ „ „ *winter*.  
*gereord* „ „ „ *spræc*.  
(Crawford 1922: 437, § 49.)

*drihten*は本来、「主」(the Lord)を意味する。  
*gear*は現代英語で *year*である。アングロサクソンの文化では、*winter*が「冬」の他に「年」を表した。  
*spræc*は、現代英語では *speech*である。現代ドイツ語 *Sprache*と同語源である。

## 2.3 語順

B写本とC写本とを比較し、ラテン語聖書 (*Vulgate*) の該当箇所をあげる。次は、Genesis CAP. IV 3 である。

MS. B 3. Ða wæs hit geworden æfter manegum dagum ðæt Cain brohte  
then was it became after many days that Cain brought  
Drihtne lac of eorðan tilingnum to the Lord offering from earth gain

MS. C 3 Hit wæs þa æfter manegum dagum þæt Cain ofrode Gode lac of  
it was then after many days that Cain offered God offering from þare eorþan wæstmum.

Gen 4 : 3 factum est autem post multos dies ut offerret Cain de fructibus terrae munera Domino (*Vulgate*)

B写本の冒頭、'Ða wæs hit geworden …' は副詞であるので、V2 語順である<sup>4)</sup>。他方、C写本の対応部分は、'Hit wæs þa …' であるので、SV語順と解釈することが可能である。

次に、続くGenesis CAP. IV 4 の校異を比較する。

MS. B 4 Abel brohte to lace ða frumcennedan of his heorde.  
Abel brought to offering the firstborn of his herd  
Ða beseah Drihten to Abele 7 to his lacum,  
then looked the Lord to Abel and to his offering

MS. C 4 7 Abel ofrode of þam frumcænnedum sceapum his heowodum<sup>5)</sup>  
and Abel offered of (gen.) the firstborn sheep his herd  
7 of his fætnesse.  
and from its fat  
Pa beseah God to Abele 7 to his lacum,  
then looked God to Abel and to his offering

Gen 4 : 4 Abel quoque obtulit de primogenitis gregis sui et de adipibus eorum et respexit Dominus ad Abel et ad munera eius (*Vulgate*)

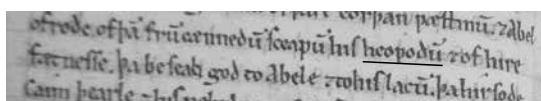


写真 2

MS. Cambridge University Library, li, 1. 33, p.12部分  
(下線は著者による。注5を参照。)

C写本の 'ofrode of þam frumcænnedum sceapum his heowodum' 中の *of* を部分属格であるとみると (小野・中尾1980: 290-291)、全体は他動詞構文である。つまり、目的語が動詞の直後に続いている構文に相当するので、C写本の言語はB写本よりも近代英語に近づいている。

次に、続く Genesis CAP. IV 8-10 の最初の文を比較する。

MS. B 8. Ða cwæð Cain to Abele his breðer: …  
then said Cain to Abel his brother

MS. C 8. Cain cwæð þa to Abel his broþer: …  
Cain said then to Abel his brother

Gen 4 : 8 dixitque Cain ad Abel fratrem … (*Vulgate*)

MS. B 9. Ða cwæð Drihten to Caine: …<sup>6)</sup>  
then said the Lord to Cain

MS. C 9. Cain cwæð þa to Cain: …  
Cain said then to Cain

Gen 4 : 9 et ait Dominus ad Cain … (*Vulgate*)

MS. B 10. Ða cwæð Drihten to Caine: …  
then said the Lord to Cain

MS. C 10. God cwæð to him: …  
God said to him

Gen 4: 10 dixitque ad eum … (*Vulgate*)

上の例を比較すると、B写本では、副詞 *ða* が文頭の位置にあり、典型的なV2構文であるのに対して、主語 *Cain* (4 : 8-9)、*God* (4 : 10) が文頭の位置にある。この箇所では、C写本の語順が近代英語にB写本よりも近いことは明らかである<sup>7)</sup>。

### 3. 音韻と方言

C写本の言語が、中英語のどの方言に属するかという問題は、Crawford (1922 : 429-439) において、音韻面から詳細な特徴があげられている。ここでは、Crawford (1922) が指摘した C写本の特徴を音韻変化と方言とについて検討する。

#### 3.1 中英語の方言

中英語以前の古英語 (OE) にも方言は存在した。中でも、後期古英語期の標準語はアルフレッド王がヴァイキングの侵略から守ったウエストサクソン

ン王国のWS (ウエストサクソン) 方言である。伝わっている古英語の文献の多くはWS方言で書かれたため、実際的にはWS方言を軸に古英語から初期中英語への変化として扱うことが普通行われている。

古英語期から、イングランド北部と南部の方言差は大きかった (図1)。

WGmcの /a : / (ā) から /æ : / (ǣ) への変化は、方言差の特徴の重要な指標の一つとされている。その後、この境界線の南側でOEの標準とされるWS方言では、/æ : / (ǣ) は、割れ (breaking) による /æɑ /, /æ : ɑ / への変化の他に、後退 (retraction) ・回帰 (reversion) によって /ɑ : / に変化した (小野・中尾1980 : 177)。

中英語は、ノルマン人による征服から約100年後、古英語による『ピータバラ年代記』 (*Peterborough Chronicle*) の編纂が終わった時点を始めとする。



図1

小野・中尾 (1980 : 177), Moore (1951 : 26)

特徴	線	N	EMid		WMid	SW	SE
			NEMid	SEMId			
OE/ā/	A	/a:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/	/ɔ:/
OE/a/ + nasal	D	/a/	/a/	/a/	/ɔ/	/a/	/a/
OE/ȳ/, /y/, /ēo/, /eo/	F	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/	/y:, y/ /ø:, ø/	/y:, y/ /ø:, ø/	/i:, ɪ/ /e:, ɛ/
/f/-/v/	I	/f/	/f/	/f/	/f, v/	/v/	/v/
/ʃ/-/s/	C	/s/	/s/	/ʃ/	/ʃ/	/ʃ/	/ʃ/
3人称複数代名詞	E	them	them	hem	hem	hem	hem
3人称単数現在	G	-es	-es	-eth	-es, -eth	-eth	-eth
3人称複数現在	B, H	-es	-es, -e(n)	-e(n)	-e(n), -eth	-eth	-eth

表1  
中尾 (1972: 98)

音韻や形態素に基づくいくつかの方言境界線が認められている (図2, 表1)。

この中でも、3人称単数 {-es} の南限を示すG線はそこより南部の {-eth} と対照的で、現代英語の3人称単数形の起源である。

### 3.2 C写本の音韻的特徴

図2、表1の指標の OE /ā/ は、C写本では /ɔ:/

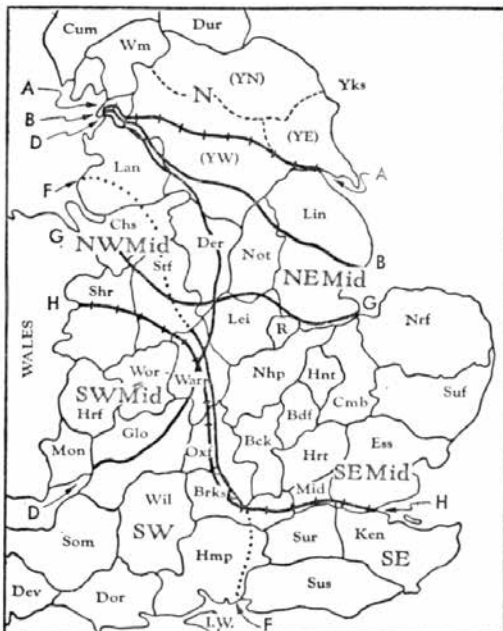


図2  
中尾 (1972: 97)、MED (p.8)

に変化した。

WS. ā > ɔ: *abód* (viii)  
(Crawford 1922: 433, § 14)

これは、北部方言以外で起きた一般的な変化である。

続いて、Crawford (1922: 438-439) が指摘したC写本の音韻的特徴をあげる。はじめに、æ > eへの変化が著しいことが指摘されている (例は一部のみ引用する)。

WS. æ<sup>1</sup> < ā + i-umlaut > e: *arecce* = *arēce*  
(Crawford 1922: 433, § 15)

上の変化は、I-ウルムラウトを受けて、a:がæ:に変化し、その後æ:の上げが起きたものである。CrawfordはこれがC写本の言語がケント方言である根拠であるという説を否定した。そうすると、LWS (後期ウエストサクソン方言)におけるæ:の上げである (中尾1985: 161) と解釈できる。

WS. æ<sup>2</sup> < WG. ā > e: *cwedom* (XIX)  
(Crawford 1922: 433, § 16)

上の変化は、伝統的に æ<sup>2</sup> として知られる分節音である<sup>8)</sup>。

次に、Crawford (1922: 439) が、C写本中でサリー (Surre) 方言ではみられない綴りであるとした例の一部をあげる。

WS. *ēa* >(1) *ia, ya : briac* (IV) , *sciap* (XX)  
(Crawford 1922: 434, § 20)

小野・中尾 (1980 : 176) によれば、/æɑ, æ : α/ は LK (後期ケント方言) で第一要素が上げられ [ja, ja : ] , <ia, ya>となる。つまり、C写本の言語が LK における変化を反映していることを示す。

次に、やや特定の環境での音変化を取り上げる。

WS. *ea* + (*l* + *cons.*) > (1) *ia : sialde* (XXI)  
> (2) *ie, ye : syelde* (XXI)  
> (5) *a : alle* (VI)  
> (6) *ae : aellum* (XIII)  
(Crawford 1922: 434, § 13)

中尾 (1985 : 226) によれば、I-Uml によって、/l/ の前位置では WS (ウエストサクソン方言) は [ry]、K (ケント方言) では [ε]、Angl (アングリヤ方言) では α > ε となった。C写本では、上の (1)はケント方言、(2)はウエストサクソン方言、(5) (6)はアングリヤ方言の変化である<sup>9)</sup>。

Crawford (1922 : 438-439) は、C写本の言語について、ケント方言説を退ける一方で、サリー (Surre) 方言にとって問題となる綴りを指摘している。C写本の言語は、南西 (South-western) 方言が、中部 (Midland) 方言の特徴を少し伴って、南東 (South-Eastern) 方言と合流する地点の方言であり、C写本の写字生がバークシャー (Barshire) 出身者であると示唆している。

小論での検討の結果から、C写本の言語は LWS の影響を受けた、ケント方言に近いものであると考える。

### 3.3 中英語における共通語の存在

Tolkienの仮説によれば、13世紀の初期中英語 (EME) において、MABと呼ばれる共通語が存在した。また、それは、古英語の共通語OABに遡り、それはウエストマーシア (WMerc) に存在した<sup>10)</sup>。

C写本の言語も、共通語の影響の上で、LWS 方言の影響下にあった共通語的性格が強い言語であったと仮定すれば、C写本の言語は、3.2節で検討したような諸方言の特徴を兼ね備えた言語であると説明できる。したがって、C写本は、ある特定の方言で書写されたのではなく、初期中英語の共通語の変異形の一つであるという見方が可能である。

## 4. 結語

この小論では、『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書 (七書)』 (MS. Cambridge University Library, Ii, 1. 33) の言語について、英語史の面から検討を行った。この C写本は、B写本や L 写本と比較して、アルフリッチ (Ælfric) が原本を書いた時代より1世紀ほど降るという点では原本からの距離に関しては劣るであろうが、ちょうど古英語から中英語に変わる初期中英語の時代に書写されており、2節で取り上げた後期古英語から初期中英語へかけての語彙や語順の変化がみられ、また、3節で取り上げた音韻面でも共通語的であることから言語資料的価値が高いと認められる。したがって、詳細にその言語を分析することは、中英語から近代英語への先駆的な言語変化を見出していく可能性を持っていると言えよう。

## 注

- 1) ケンブリッジ大学図書館所蔵の写本のカatalog (Janus Archive Catalogue) はWeb サイト (<http://janus.lib.cam.ac.uk/>) から閲覧することができる。
- 2) ケンブリッジ大学図書館所蔵の写本 (MS. Cambridge University Library, Ii, 1. 33) は『七書』の完本ではない。
- 3) 別稿 (小林 (2015, 近刊)) で固有名詞としてのGodについて論じた。

- 4) 定形動詞が文頭から第2要素となる言語。典型的なゲルマン諸語でみられる語順で、現代ドイツ語の主節の語順もこれに当たる。
- 5) *heowodum*は、*heord*の異綴りの与格形(-um)であるとみなした。なお、古英語のアルファベットの字形において、'w'として用いられた'wynn'の字形と'r'の字形は似通っているために生じた写生字またはテキストの誤りであるという疑いが残る。写真2を参照されたい。
- 6) *Cain*に-eが付け加えられている。写生字が語末に-eを付け加えることがあった。これは、scribal -e(写字上の-e)と呼ばれる。
- 7) C写本における副詞*þa*の位置は近代英語と異なる。動詞が副詞に先行する語順をとる理由は、統語論的には定形動詞*cwæð*はTPにあると説明される。近代英語では、定形動詞はTPまで移動せずに、時制接辞を付加される。
- 8) OE: a:は、WSではæ:に変化していたために、I-ウルムラウトが起きなかった(中尾1972:223)。
- 9) Crawford(1922)は綴りをあげているだけである。小野・中尾(1980:33)によれば、ケント方言の<eo>、<io>の第二要素は非円唇化して、しばしば[ea]、[e:a]、[ia]、[i:a]となる。したがって、(1)の*ia*は、ケント方言の[ea]から変化したと推定される。
- 10) この仮説についての詳細は、小野・中尾(1980:189-190)を参照されたい。なお、この議論は、*Ancrene Wisse*の写本間の校異に基づくのであるが、この仮説の共通語は、現代の共通語の概念とは異なり、地域性を持ち、相対的な統一性である(Milroy, J. (1992))。

#### 参考文献

- Allen, C. L.(1995). *Case Marking and Reanalysis: Grammatical relations from Old to Early Modern English*. Oxford: Clarendon Press, 158-220.
- Crawford, S. J.(1922). *The Old English Version of the Heptateuch: Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*. EETS 160. London: Oxford University Press. Reprinted with additions by N.R. Ker(1969).
- Kemenade, A. Van and B. Los.(2006). Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English. In Kemenade, A. Van and B. Los(eds.). *The Handbook of the History of English*. Malden, MA, USA, Oxford, UK, Victoria, Australia: Blackwell Publishing, 224-228.
- 小林茂之(2015, 近刊)『『ケンブリッジ大学図書館蔵古英語版旧約聖書(七書)』におけるGodの使用について』(仮題).『キリスト教と諸学』. 29巻. 聖学院大学キリスト教センター.
- Magennis, H.(2011). *The Cambridge Introduction to Anglo-Saxon Literature*. New York: Cambridge University Press, 16-132.
- Marsden, R.(1995). *The Text of the Old Testament in Anglo-Saxon England*. Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 15. Cambridge: Cambridge University Press. 395-443.
- Milroy, J.(1992). Middle English Dialectology. In Blake, N. (ed.). *The Cambridge History of the English Language. Volume II 1066-1476*. Cambridge: Cambridge University Press. 156-206.
- Mitchel, B.(1985). *Old English Syntax*. Volume I. Oxford: Clarendon Press. 506-510.
- Moore, S.(1951). *Historical Outlines of English Sounds and Inflections*. Rev. A. H. Marckwardt. Ann Arbor: Wahr. 26.
- 中尾俊夫(1972)『英語史II』. 英語学大系9. 東京:大修館書店.
- \_\_\_\_\_ (1985)『音韻史』. 英語学大系11. 東京:大修館書店.
- 小野茂・中尾俊夫(1980)『英語史I』. 英語学大系8. 東京:大修館書店.
- Roberts, I.(1997). Directionality and Word Order Change in the History of English. In Kemenade, A. van and N. Vincent(eds.), *Parameters of Morphosyntactic Change*. Cambridge: Cambridge University Press, 397-426.
- \_\_\_\_\_.(2007) *Diachronic Syntax*. Oxford, New York: Oxford University Press, 40-64.

#### 謝辞

本稿の研究は、JSPS科研費 23520588の助成を受けたものです。また、写本閲覧・撮影許可に関する研究上の便宜を図って下さったケンブリッジ大学クレアホール・コレッジと同大学図書館の関係者各位に厚く御礼を申し上げます。

(こばやし・しげゆき 聖学院大学人文学部日本文化学科准教授)